空はひとつ

菊埼　威

9月28日に、中国駐新潟総領事館主催の日中友好平和シンポジウムがあった。新潟はじめ山形、福島、宮城県の日中友好関連団体や平山征夫元新潟県知事など県内外の政財界の方が多く参加し、私も日本中国友好協会長岡支部長として招待され参加した。

最初に、エッセイコンテスト（事前にエッセイの募集があった）の授賞式があり、私も応募していたので、名誉なことに優秀賞を得た。次に、日中の青年5人によるスピーチがあり、それぞれに歴史を知ることの大切さと草の根交流の必要性について述べられた。休憩をはさんで、南京大学平和学研究所の劉成氏や新潟国際情報大学の佐々木寛氏ら研究者や民間の平和友好運動に携わっている6人によるスピーチがあり、私もその一員としてスピーチした。

劉成先生は、平和を築くことは傷ついた歴史を修復することであるとして、平和教育の大切さを話され、佐々木先生は、歴史に対して謙虚であれ、まず加害を学ぶことから始めよ、と常々学生に伝えていると話された。

私は、２００８年から5年間、中国南京市の大学で日本語教師として勤めたが、その経験をもとに日中の友好平和について、概略以下のごとく話した。

私が南京にいた時代は、ちょうど領土問題で騒がしい時で、中国中央テレビのトップニュースは、連日、これで、さらに、戦時中の抗日を描いたドラマが盛んで、そこには敵役としての日本人、それも愚かで残虐な日本人が登場し、彼らの蛮行が映し出される。そういうドラマや先のニュースを見ていると、いわば

にいがた
北から南から

全国的な反日ムードのなかに、ただ一人包囲されている気分になり、いささか気が滅入ってくる。学生は私の身を案じて、電話やメールをくれ、「先生、大丈夫。わたしたちがいる」と励ましてくれた。

領土問題のせいで私が病気になってしまうという、魯迅の『藤野先生』ばりの小説を書いた学生もいた。この作品は、中国の雑誌『青年報』の最優秀作品になり、本人は日本旅行の賞を得た。

中国の若者は、幼い頃から、好戦的で侵略主義者としての日本人が登場するテレビドラマを見、学校では愛国主義教育で育っているので、日本に対する好感度はよくない。彼らの多くは、かつての河村名古屋市長の発言や石原元都知事や安倍元首相の動向を、日本における一般と理解し、なかには本気で戦争を心配する者もいた。

最近も、中国では「南京写真館」や「７３１」という映画が話題になり、それを冷静に見ている人がいる一方で、反日感情が強まったというニュースを見た。

なぜこうなるのか。ここには日本の戦争責任の不始末がある。

１９７２年の日中共同声明とその後の平和友好条約、そして１９９５年の村山談話はまがりなりにも侵略戦争の反省を述べ、日中友好に前進の扉を開けた。しかしここに至るまでに、27年も要したこと、何よりも戦争責任がありながらも、その責任を取ろうとしない為政者が多くいたこと、そして現在もなお、朝鮮や７３１や南京での虐殺、そして三光作戦などはなかったかのように語る政治家や学者がいて、あの戦争を正義の戦いだとして賛美する風潮が根強く残っている。日本は、未だに過去の誤りを正しく清算していない。それどころか、歴史を改竄し、かつての蛮行を正当化し、またもや大日本帝国の世界に戻そうとしている政治家もいる。このことは中国から見れば、日本の面従腹背の姿として映る。これが平和友好の大きな障壁になっている。

中国には「歴史を鑑とする」という言葉がある。日本でも、3・11の東北大震災を語りつないでいる人たちは「過去の記憶は未来の命を守る」といって、伝承の大切さを訴えている。やはり大切なことは、歴史にたいして正しく向き合うことだ。あの戦争は何であったか、その実相を真摯に見つめなおすことが私たちには課せられているし、それが未来の平和につながる唯一の道だ。

今年は戦後80年という節目の年で、マスメディアでも戦争と平和に関して多くの報道がされた。この戦後と言った時の戦争はアジア太平洋戦争だが、日本が具体的にアジア侵略に踏み出す第一歩は1875年9月20日の江華島事件だ。以後、朝鮮半島と中国大陸、そしてアジア各地で、大日本帝国は残虐な殺戮を繰り返す。平和な戦後80年の前に、悲惨な戦争の時代70年があったことを忘れてはならない。今年は戦争開始150年になる。

この戦争の時代70年間に、朝鮮半島でも中国でも大日本帝国は殺戮を繰り返した。特に中国では、兵士150万人、民間人2千万人を殺害したという数字がある。この数字の違いは、いったい何を意味するか。

中国の華北戦線で戦ったある兵士は、生身の体に銃剣を刺すことに最初は体が震えたが、そのうち、豆腐を刺す感覚になったと言う。女性に乱暴することも、子供を殺すことも、家を焼くことも、何の抵抗もなく、罪の意識もなく、むしろ良いことでもする感覚でやったと言う。どうしてか。

明治維新政府は欧米列強と肩を並べるために、朝鮮中国侵略に向かうが、そこには吉田松陰や福沢諭吉のアジア蔑視・アジア侵略思想があった。諭吉に「チャンチャン…皆殺しするは造作なきこと…支那兵如き…豚狩りのつもりにて」という言葉があるそうだが、大日本帝国下の日本人は幼少時からの教育の中でこの根深い民族差別意識を醸成されたことになる。

差別意識、優越意識、排外主義が途方もない残虐な結果を招くことは歴史が教えている。

ウクライナやガザでの悲惨さもまさにこの延長線上にある。

反日ムードのただなかで、私の周りにいた学生は、日本語を学び、なまの日本人に接し、日本への思い入れが強くなっていく。彼らは日中両国の厳しい関係や日本の政治状況や嫌中率9割という日本の国民感情に困惑しつつも、日本語や日本について一生懸命に学び、そして生涯、中日友好に尽力したいという。

そういう彼らに、南京でも日本でも民間で草の根で頑張っている友好人士がいることを伝え、「両国の将来は君たちの肩にある。君たちがいる限り両国関係の将来は明るい。頑張れ」とよく言った。

彼らは、私と出会ってよかったとよく言ってくれた。私もまた学生との間にそういう関係を作れたことをよかったと思っている。

学生やその親、そして街の人々、ここに中国の大地とそこに住む人々のありのままが現れており、そういうありのままを理解しようと努め、信頼関係を築く、そういう草の根の交流こそが、国際平和の根幹だ。

私はこのように述べ、最後に会場のみなさんに、中国に親しい友をつくりましょう、誰も親しい友を傷つけようとは思わないし、そのことが二度と戦争という過ちを犯さない証にもなる、と呼びかけた。

ミクロネシア連邦の憲法には、海は人を隔てるものではなく、人をつなぐもの、というような言葉があるそうだが、差別主義や排外主義が横行しようとしている今こそ、東アジア共同体を意識した友好交流に意を注ぐべきだと心から思う。

後日、この日親しくなった長岡技科大の中国人留学生数人が、日本中国友好協会長岡支部の餃子を作る会に参加し、交流を深めることができた。今後の展開が楽しみだ。

（きくざき　たけし　長岡市）